最後の七日間

編集
谷川清隆
(成城大学・国立天文台)
tanikawa.ky@nao.ac.jp

2005 年 1 月

まえがき

編者は考える。カオスは完全な秩序と完全な無秩序の間の状態である、と。

完全な秩序も完全な無秩序も理想化された概念であるから、われらが世界は実はカオスそのものである。世界あるいは宇宙がいまの状態にあるのは、それがカオスだからである。星が銀河が、また地球や生命や人間が存在できるのは、世界がカオスだからである。われわれにとって世界が意味あるのは、それがカオスだからである。

世界という言葉とカオスという言葉が同義語であるなら、言葉の置き換えにすぎないではないか。そのとおり。ひとは昔からカオスを知っていた。木の葉が落ちるようすを見、流れる雲の形を眺めているとき、また、あったかもしれない自分の別の人生を思って悔やんでいるとき、ひとは世界のカオスを感じていたのである。

しかし、昔といまは違う。何が違うか? そう。世界のカオスを対象として明確に認識したことである。われわれは世界の秘密に立ち向かう新たな道具をつい最近、ここ 20 数年の間に、ひとつ手に入れたのである。

世界がカオスであるとすると、われわれが問いうるのは、世界はどの程度カオスであるのか、である。はじめに述べたとおり、カオスは完全な秩序と完全な無秩序の間の状態である。世界が完全な秩序からどれほど隔たっているのか？また完全な無秩序からどれほど遠いのか？これについてわれわれは答えることはまだできない。

不正確になることを覚悟のうえで具体例を考えよう．完全な秩序も完全な無秩序も生命にふさわしくないことが容易にわかる。

世界中の人間がいつまでもじっと立っている、あるいは座っている。これは完全な秩序に支配された世界の一例である．そしてこの世界が永遠に続き得ないのは明らかである。世界中の人間が毎朝それぞれ会社あるいは学校に出かけ、午後あるいは夕方きちんと帰宅する．しかも人ごとに出かける時間も帰宅する時間も、行き先も変わらない．これが永遠に続く．ぞっとするような世界であるが、これも完全な秩序の一例である。世界中の人間がそれぞれ会社あるいは学校にでかける、午後あるいは夕方きちんと帰宅する．ただし、人ごとに出かける時間も帰宅する時間も、行き先も日毎に少しだけずれる．たとえば、

ひと電車早く行くとか、学校に遅刻する。これも一例である．成長も老いもなく、昇進も転勤も転職もない。

人間社会での完全な無秩序を想像するのはかなりむずかしい。なぜなら完全に無秩序なら社会は成立しないことは明らかだからである。

敢えて、想像をたくましくしてみよう。一週間で世界が完全な無秩序になるとしたらどんな変化が起こるか? また一週間で世界に完全な秩序が来るとしたら何が起こるか?

世界を 7 日間で壊してみようではないか。次ページの壊し方はほんの一例である。

谷川清隆

月曜日、わたしはいつもどおり妻に玄関まで送られて、高校生の息子と一緒に家を出、勤め先に向かった。新宿駅で乗り換えたが、今日は人の数がやや少ない。息子はいつもは「行って来ます」というのだが、ぶすっとしたままなにも言わずに別のプラットホームに行く。勤め先は研究会などで人が出はらっているようだ。何人か新しいスタッフが就職して来たらしい。見知らぬ研究者が構内を歩いている。

火曜日の朝、いつものトースト、ハム、サラダ、ミルクの朝食ではなく、ご飯と味噌汁であったが、これも悪くない。つとめに出る。息子は関係ないといった感じで少し離れて立つ。新宿駅の人の数は昨日より減っている。何か妙だ。勤め先に着くと、外国人客員の定員が増えたはずはないのに、初めて見る外国人の研究者が何人かいる。今日の研究室セミナーは古代史の話であったが、それなりに興味深かった。

水曜日、朝一緒に出た息子が新宿で降りない。理由を聞く間もなく、わたしは人波に押されて電車を降りる。勤め先までのバスは、いつもとは違うルートを通る。工事で通行止の場所でもあるのだろう。研究室に入ると、いつも珈琲を飲みに来る同僚の K 氏がわたしの席に座っていた。「やあ」と言ってそのまま仕事を続ける。わたしは仕方なく別のコンピューターの前に座って仕事をした. 家では久しぶりに料理を作った。妻はどこかに出かけているようだ。

木曜日、息子は止める間もなく、駅で反対方向の電車に乗っていった。勤め先では庶務課の部屋で一日中過ごした。仕事の勝手がわからず、いつも通勤途中で読んでいる本を広げて読んでいた。勤め先から家に帰ってみると、息子はおらず、見知らぬ娘が夕食を食べている。今日の料理はボルシチである。妻は平然とふたりにおかわりをくれる。妻の眼の色が緑であることに気づく。

金曜日、朝、わたしは東北新幹線に乗って水沢江刺に向かった。自分の勤め先が水沢の観測センターであると思えてきたのだ。列車はスピードを速くしたり遅くしたり乗り心地が悪かった。倍も時間がかかった。駅前からタクシーに乗って、「天文台、お願いします」というと、運転手は道順を聞く。観測センターの建物の 3 階の研究室に入り、仕事を始める。もっとも、机の前に座っても何をしていいか判らない。7、8 年前に退官したはずの先輩がこちらを見てニコニコ笑っている。彼女は生け花をしているところだ。

土曜日、観測センターで昔住んでいた官舎で眼を覚ます。昨晩、街に出て酒を飲んだことを思い出す。誰と飲んだか覚えていない。勝手に酒を取って飲んだような気もする。朝食の席で前に座っている女性が妻なのであろうと納得する。実は、顔は丸く、凹凸が少ない。もしかすると男なのかもしれない。天文

台の外に出ると、自動車が何台も路上に乗り捨てられている。水沢公園に行ってみる。軟式テニスコートでは何人かの人がコートのなかでボールもなしにラケットを振り回している。

日曜日、朝、冷蔵庫を開け、パンと牛乳を見つけて朝食を軽く済ます。牛乳はなまぬるい。水沢の市内まで歩く。商店は昨日から開けっぱなしのようだ。誰もいない。外はうろうろと動き回っている人ばかりである。わたしも、何のためにここにいるのか、自分が誰なのか判らなくなってきた。人の顔がもはや区別できない。ガラスに映る自分の顔はますますまるくなり、意識も薄れつつある。

(谷川清隆、国立天文台ニュース [1999 年 7 月 1 日号] より)

目次

まえがき i
例題 (谷川清隆) iii

保積 弘美 1
甲斐 千晶 3
加納 千晶 5
守屋 幸恵 8
佐藤 里奈 10
阿部 渚 12
増山 正人 14
駒崎 成亮 16
瀬尾 香往里 18
稲垣 仁 19
安藤　衣里子 20
千代住　祐子 22
和田 将 24
坂口 徹 26
高木勇輔 28
大竹 千尋 30
友村 左近 32
石井 知佳 34
小林 由弥 36
遠井 友彦 38
清野 佑太 40
小西 亮司 42
大内 麻子 44
藤井 遼太 45

山口 祐司 46
伊牟田 莉那 47
長沢 遼 49
本田 幸平 51
南木 健佑 53
田中 華奈絵 54
白川 哲也 56
又吉 千幸 58
細野 隆太郎 60
金 英二郎 61
吉村 卓真 63
郷司 廣之進 64
斉藤 雅義 66
坂本 まゆみ 67
佐野 友和 69
小池 春花 70
寺嶋 千景 73
杉原 和樹 75
黒田 麻美子 76
加藤 万理 77
吉岡 正成 79
小礒 美穂 80
佐藤 美里衣 82
鈴木 麻以 83
瀧田 啓示 84
入江 華奈子 86
橋本 奈穂子 92

竹内 俊太 94
岩方 寛 100
江森 郁実 102
鈴木 達矢 103
小金井 祐子 105
原口 明子 109
安東 太 111
加藤 大騎 113
小泉 仁子 115
鈴木 直登 117
宮下 綾乃 118
中西 菜奈子 120
坂口 昇 122
佐藤 智 124
仁平 顕一郎 126
新林 諭 128
田淵 雅弘 130
野沢 有希 131
中村 純也 133
村田 真也 135
目加田 康亮 137
林 七菜子 139
野村 祐介 141
渡辺 和憲 143
瀧藤 泰識 147
谷川 清隆 149